学苑　No. 815　226～238（2008・9）

ブックレット座談会

平成20年7月23日

近代文化研究所所員

加藤　澄江（客員研究員）
平井　　聖（特任教授）
島田　淳子（特任教授）
小田　きく子（教授）
安蔵　裕子（教授）*
角田　由美子（教授）*
西脇　和彦（教授）
大橋　きょう子（准教授）*
秋山　久美子（准教授）
礒野　さとみ（准教授）
司会　竹田　喜美子（研究所長・教授）

*誌上参加

竹田（以下，敬称略）　この会を企画いたしましたのは，2005年に，5冊の刊行を所期の目標に掲げて開始された新シリーズ「ブックレット　近代文化研究叢書」が，その目標を達成し，一区切りという時期を迎えたためです。今日は，これまでにお書きになった先生方にいろいろな思いを述べていただき，質問や意見の交換をいたしたく，お集まりいただきました。第2次近代文化研究所員は，近代の生活文化を研究対象にしておりますが，こうした交流を通して，研究の質，所員の質を高めていきたいと考えております。よろしくお願いいたします。ではまず，**『チキンライスの日本史』**（2005年7月1日），**『トマトの日本史』**（同年8月15日）ご執筆直後，2005年8月10日に逝去されました故小菅桂子先生にかわり加藤先生，いかがですか。

加藤　意見というのはございませんけれども，ただどんなにか彼女は無念だったろうとは思います。いろいろ用意した資料を使ってこれからやっていきたいと思っていた矢先でしたから。『チキンライスの日本史』や『トマトの日本史』が刊行できたことは心から喜んでおりました。次は「コロッケ」について書くと決め，資料も集めていたのですけれども，こんなことになりましてね。初めは，お婆さんが二人でどこまでやれるかしらねなんて笑っていたのですが，若い彼女の方が先にこういうことになり，ここで終わりになってしまいました。先生のお気持ちだけお伝えします。

大橋　近代文化研究所が大学5号館にありました時に，小菅先生には何度かお目にかかってお話しさせていただいたことがあります。『トマトの日本史』に続いて，洋食の近代史をこれから纏めようとしていらっしゃることなどを伺い，ぜひ一度，生活科学科の「食と文化」の授業に講師としてお招きしたいと申し上げたことがありました。その時，先生はいつでも声をかけてくださいと快く仰ってくださいました。それが実現できずとても残念です。

竹田　小菅先生がご専門の立場からお書きくださったことは私どもの大きな励みにもなったかと思います。資料についての知識も豊富でいらしたので本当に残念です。これを「食」の分野で受け継いでいただければ大変ありがたいと思います。小田先生の**『おにぎりに関する研究（第1報）』**（2005年3月25日）がブックレット第一弾でした。大変だったと思いますけれども，いかがでしたか。

小田　第2報は10年くらい先と考え，第1報とさせていただきました。私は駅弁の歴史を調べてまいりましたが，最初の駅弁が宇都宮のおにぎり2個でした。それがきっかけで，おにぎりの歴史，ルーツを調べましたところ，古代の神への供物からはじまり，以降の文献や挿画などにあたると，野良仕事をしながら食べていたり，旅人が道端で食べていたり，あちこちに登場しますし，近代になると島崎藤村の『破戒』や志賀直哉の『暗夜行路』，夏目漱石の『坊ちゃん』，『草枕』などにも描かれているものですから，そのようなところを少しずつ整理すると同時に，日本全国でおにぎり，おむすび，にぎりめしなどいろいろな呼称があるけれど，どんな形が多くてどのように食されるのか，その実態を食べる立場から調べようとしました。私が歩いて調べるのが一番いいのですが，それができませんでしたので，農山漁村文化協会から刊行された『日本の食生活全集』47冊の端から端まで，一応あたり，文献から統計的

に纏めてみたということです。挿絵は平井先生ご所蔵の『江戸名所図会』が拝借でき，利用させていただきました。その節はありがとうございました。

そしてこの後，現代のコンビニや「デパ地下」のおにぎりブームがきます。どんなおにぎりが一番好まれているか，若い人の好みはどんなものか，どんな時に食べているかといったことを調査し，5年後，10年後に同じ調査をして変遷をみたいと考えております。近年は駅弁におにぎりが使われることは少なくなっておりますし，車内販売やホームにもコンビニのようなものが設置されてそこで売られていますし，おにぎりの利用の仕方もこれから変わり続けるのではないかと思います。

竹田　食の領域の先生の方から，何かいろいろご質問とかございましたら，加藤先生いかがですか。

加藤　その後のための資料は集まったのですか。

小田　第1報はブックレットが文化的なことを，という趣旨でしたので先に発表しました。第2報以降は「現在」の調査が主体ですから「学苑」生活科学紀要に載せようかなと考えております。ライフワークとして続けられたらと。

加藤　期待しておりますから，よろしく。

竹田　島田先生，何か。

島田　この4月に所員になったばかりで全体像を把握しておりませんので，近代文化研究所のありかたを含めて後でまとめてご質問ということでいいですか。

竹田　生みの親でいらっしゃる平井先生，いかがでしょうか。

平井　私の思いはブックレットの一番後ろの「近代文化研究叢書刊行に当たって」に書きました。どういう形で書いていただいても構わないけれど，資料的な価値だけは失わないようにしてくださいと書いておきました。書く以上，ある程度自分の考えが入らなければいけないのは当然ですが，そんなに中身にこだわらなくてもいいと思っています。レベルの問題やいろんなことで仰る方は多いかとは思いますが，それでは後が続きませんので。私としては，まず数を出すことの方が大事だと，できるだけゆるやかに出していきたいと思っています。

島田　生活文化についての資料を遺すということですか。

平井　資料だけはきちんと押さえたうえで，自分の考えに基づいた叙述をするということです。自分の考えがあって資料を選択するわけですから。

島田　どういう読者を想定しているのですか。

平井　それは，結局は部数にかかわりますね。300部という小部数出版ですから，読者は自から限られてきます。一般読者にまで広がっていけば大変嬉しいですけれども。今後は売り方を考えなければいけない。ホームページ等に載せて，いろんなキーワードで検索すればヒットするような形をとるといった工夫が必要だろうと思います。幸いに私の本**『「猫の家」その前と後『吾輩は猫である』を住生活史からみると』**（2008年7月10日　改版1刷）なんかはすぐインターネット本屋のアマゾンだとか，紀伊國屋が載せてくれています。宣伝を考えた表題の選択ということですね。私の表題には，それもあって，『吾輩は猫である』を入れましたから，漱石という名前はないけれども，漱石研究者の誰かの目には触れるでしょう。本を手にしていただいて，先ず何かを考えるきっかけにしていただければいいと思っています。

島田　ブックレットは研究業績として位置づけてもよいものだということですね。

平井　私はそう思っています。

島田　ブックレットはエッセーなのか学術書なのか，研究者として発表の手順をどう踏んでいくのか，外部の学会誌，学内の紀要との関係をどう位置づければいいのか，研究所のありかたも含めてその辺りが分からなかったのです。

平井　「学苑」や紀要に書いても，どうしても一般化できませんね。紀要は，関係のあるところには献本してはいるけれども，大衆の目に触れませんから。私としては，研究というのは研究者の間で広まるのも確かに必要ですけれども，それをやはり一般の人にも知ってほしいということがあります。建築の分野などは特にそうですが，非常に特殊で，建築関係の本だけ出している出版社から刊行することがほとんどで，そこから出すと普通の人の目にはまず触れることがありません。本屋の棚に並べてもダメです。ところが一般書を出している本屋から出せば，これは違うわけです。私は研究をもっと広く知ってもらうには，こちらの方がよりいいのではないかと思っているものですから。その点ではあまり硬く書かずに読み易いように書いてほしいということもあります。ただ，いくら読み易さを重視しても資料的価値だけはどうしても失いたくないから，根拠だけはしっかりしたものをということだけは守りたい。ブックレットの記載を引用したら間違っていた，というのでは困ります。一般書扱いの本でも，お前の本ならば，孫引き

しても孫引きととられないで済む，それくらいちゃんとしている，と認めてもらえることが本としては大事なことではないでしょうか。論文で考えても，それをどんな人がどのくらい引用したかということは，その論文の価値に係わってきます。特に歴史的な分野は多くの人に読んでもらわないと意味がないので，その点では「学苑」だけに発表するのでなく，ある程度まとまった段階で必ずこういうふうにしてほしい。

島田　「学苑」は学術機関誌として，一応審査を通った研究成果を掲載しますね。

平井　一応そういうことになっています。この大学としてはそうしていますけれど，よそで認められるとは限りません。他大学でも紀要のポイントは低いものです。

島田　ステップアップを考えれば学内紀要に出さないで，なるべく学会誌に発表した方がいいわけですよね。

平井　それはもう，紀要との関係で言ったら絶対にそうです。しかし紀要とブックレットの狙いとはちょっと違ってきます。

島田　ブックレットは，紀要などに出したものを纏めて，著書として刊行するものと思っていいわけですね。余程でないと書けないですね。

平井　そう思います。でも，余程ということはないでしょう。

小田　ブックレットを出した後に，「おにぎりに関する研究」を読んだと仰って，NHKのジャパノロジーという，日曜日の夜中の外国向けの，日本文化を紹介する番組から出演を依頼されました。30分くらいアメリカ人と遣り取りをいたしましたが，本当に神様におにぎりをお供えする儀式があるという話を，三角のおむすびを神様にあげている映像とともに紹介したり，全国から集めたおにぎりのいわれを英語で説明させていただきました。

平井　「学苑」ではそうはならないと思うんですよ。ブックレットは書籍として取次店を通し流通経路にのせていますから，注文して本屋で購読できることの意味は大きいと思います。ISBNのナンバリングが国名，発行元，ジャンル名，価格などの情報を伝えて市販を可能にしていますし，国立国会図書館にも納本していますからホームページの「日本全国書誌」やNDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム）に書誌データが記録されて，国民共有の文化的資産として保存されています。著書としてはっきり認められているということです。

島田　紀要を何号か出して，それを纏めて著書にしてもいい。

平井　それはもう大変結構な話です。初めのうちはなかなかそこまでいきませんでしょ。

島田　いかないですね。

平井　そんなこと言ってたら，一冊も出ない。出せる方から出してくださいというのが，私のお願いなわけですよ。

小田　だからあんまり考えないうちに，出させていただいて。

竹田　最初の方は本当に大変だったと思います。

島田　ブックレットの性質が大体分かりました。おにぎりの歴史もそうですけれども，歴史の研究には興味がありますが，例えばおにぎりならおにぎりについて，何をどれだけ調べたらこうだと言えるのか，たくさんある歴史の資料の中から自分なりにちょっと拾い出したけれど，何を根拠にどれだけ拾い出したからこうだと言えるのか，そういうところはどう考えればいいのでしょうか。

平井　ある程度やってきた人間からすれば，こういうふうにやるのがいいとか，資料ならこういうようなものがあるという見当がつくわけですよ。建築のことをやっていて，例えば東京都の中央図書館の特別文庫へ行けば，ものすごい数の古文書がある。でもどういう人の遺したものであるとか，どういう人が書いたものである，何について書いたものであるということぐらいは，基本的なカードを見れば分かりますから，建築に全く関係ない資料は，かなり早い段階で分かりますし，使えるものがセレクトできます。場合によってはそこで間違えて選んだものを除外することもありますけれども。少し多めに考えていれば，たとえば江戸城のことでしたら，江戸城に関係ありそうなものから拾っていくと，関連するものが芋づるのように出てきますから，今度は際限がなくなるかも知れませんけれども，そのときは自分なりの視点を決めれば，その範囲内で必要な資料がちゃんとセレクトされてくるわけですね。その後は似たような資料を探していく道ができてきます。

島田　そこまでいくのは，すごく大変ですね。

平井　『「猫の家」その前と後』は，漱石の猫の家について評価するだけでも，他のことをこれだけやっておかないと，書けません，ということの一つサンプルのつもりです。おそらく，その時代にどんなふうに封建的な家屋や暮らしがあって，その中での漱石の千駄木の家や暮らしをどう位置づけるか，というようなところはほとんど見られてこなか

ったところだと思います。まずはそのものだけをレポートすることが必要ですが，その状態では弱いなという気がしています。『「猫の家」その前と後』は，改訂版で大分中身をすっきりさせたつもりですけれども。初刷と内容はほとんど違っていないのですけれども，折角やったから漱石の書斎の復元を入れようという話になりまして，書斎の復元図を加え，写真を2枚追加しました。はじめの部分が大分纏まったと自分では思っています。移築された明治村の家は書斎だけが復元できていません。明治村としては，資料を得たらちゃんと復元しますと報告書に書いてあるんですね。

小田　神奈川近代文学館では，早稲田の漱石山房の書斎を，遺愛の道具などを展示して再現していますね。

平井　ああ，そうですか。

安蔵　服飾文化に照らして思い当たることですが，小池三枝先生が『服飾の表情』の中で，漱石の『吾輩は猫である』で猫の言葉を借りて述べた衣服論の説得力を評価しています。猫が言う「人間か衣服か，衣服か人間かというくらい重要な条件である。」というくだりを引用しながら，カーライルの『サーター・リザータス』の中の言葉を部分的にはめ込んでいることに触れて，漱石は「「猫」から見た人間論としての衣服論に作り直した。」と考察しています。また，『坊ちゃん』の「赤シャツ」にはどのような着衣を設定したかについて，漱石が描写する人物，当時のシャツの形状や繊維製品としてのフランネルの存在，そして赤色の意味などを挙げ，「フランネル地のスタンド襟のみの赤いシャツを和装の中に着た姿」を導き出しています。漱石の人物描写を書き分けるのに欠かせない服飾へのこだわりは，住まい方や住空間の描写と通じるものがあるように思えます。

竹田　今，島田先生がちょっと疑問に思っていらしたことは歴史的スパンでの研究が不足している私にもよく分かります。どこまで資料を集めればいいのかというところがなかなか怖くて決断できないところがあります。歴史を研究されておいでの先生は資料もお持ちですし，その辺りの決断が割合厳格にお出来になるのだと思います。

島田　そこなんですね。

角田　私もそう思います。私は今まで歴史的な視点から研究していなかったため，資料の収集および有効性の判断ができずに困っています。ブックレットの位置づけを，先生方のお話を伺って理解できましたが，実際に纏めるとなるとかなり難しいと思います。

大橋　研究の目的とそれに対する明確な自分の考えがなければそうやすやすと資料を選べません。その資料がどのような根拠に基づいて，しかもどのような意味があるのか，そのことが一番難しくて…。文化史的考察をする上で，意味のある資料を集めることが最も大切なことだということは分かるのですが，実際に研究対象となる資料の選択が，今の自分にとっては大きな課題です。

竹田　資料を限定し，それを正確に把握し伝えることから始めなければ際限がなくなる，と今は思っています。限定した範囲内でどれだけ分析できるかということかと。

平井　皆さん方はいきなり，現代，近代をご覧になってお考えになるので，それは間違いなく大変だと思います。一般の歴史でもそうですけれど，建築の歴史でも，中世までをやっている人は割にそれで迷いません。中世までの資料はほとんど印刷刊行されていて，図書館へ行きさえすれば全てが閲覧できる，つまり埋もれている資料というのはほとんどありませんから。

島田　ないんですか。

平井　はい。活字化されています。あの，ミミズののたくったような字を読む必要もないんです。私は江戸時代をやり始めた時には，よくあんな面倒くさいところをやるね，と言われたこともありました。太田博太郎先生（1912-2007）もご自分が中世を専門とされた理由を全部活字になっているからだよと仰ったくらいですから…文化財に指定されている建築も中世までは，残っているものはほとんど指定されています。後で余程めちゃくちゃにいじられたものでない限り，重要文化財に指定されていますから，実物を研究するのも中世までしたら楽です。一方，江戸時代をやる人はほとんどいませんでした。それこそ足で探さないといけませんので。私の場合も武家住宅，それも全部なんてとても無理なので大名クラスの武家住宅と決めました。そしてまず全国を複写して歩くところから始めました。最近でも，まだ新しい資料がでてきますので，江戸時代はこれで資料を探し終わったということはほとんどありませんね。太田先生には，とにかく今までの資料をきちんと押さえておれば，新しい資料が出てきてお前の説がひっくり返ってもそれはお前のせいではない，今までの資料を見ないでひっくり返ったのなら，それはお前の責任だ，と言われました。足で書く，ということは，大学の卒論以来ずっと

続けました。それでもこのごろ，大分さぼっているかな。誰かが代わりに卒論か，修士論文か，ドクター論文かなんかのネタにして探してきてくれればいいかなと思ったりして，ずるくなってきましたけれども。

島田　ブックレットの性質は分かりました。ということは，これだけの近文研のメンバーで書き続けるのは大変ですね。

平井　大変ですよ。でも著者はメンバーでなくても，ちょうどいい学位論文をお書きになったような方があれば，是非このテーマで書いてくださいということがありうると思いますよ。

島田　それは他大学の方でも，ということですか。

平井　そこまで広げるかどうか分かりませんけれど，学内でしたら，例えば，最近通った学位論文みたいなものも，もう少し一般向けに纏めてブックレットにして，資料としての価値を遺してもいいと思うんですね。

島田　論文を幾つか書いて，その中で中身のしっかりしたものを，一般の人に分かるような資料として価値あるものに纏める。ブックレットだったら内容を限定して公表でき，しかも一般向けということですから，いいですね。

平井　先鞭をつけてもらいたいですね。そうすると後に続く人も私もという話になってくると思います。

礒野　ブックレットの順番がそろそろではないかと思っていますが，どのようなものを作成すればよいのか，原稿の枚数も多いですし，かなり内容も詰めないとだめなのではないかと悩んでいたところです。先生のお話を伺い少し気持ちが軽くなったように思います。今までやってきた研究を一般向けに書き直すと思えばよいのですね。ブックレットの材料として可能性のあるものを探してみます。

秋山　各先生方のブックレットは長いご研究を纏められたもので，たいへん価値のあるものだと思います。私のように食物史の研究を始めたばかりでは，とてもブックレットを書くに至りません。「学苑」に出させていただき，各方面からのご意見をいただいた上で，何報か纏まったときにブックレットという形で実を結べればよいと考えております。

安蔵　先生方の著作を拝見し，生活文化の変化を多方面からつぶさに捉えることの大切さを感じます。「近代化」という言葉一つとってみても慎重に扱わなければならないこと，丁寧な資料収集と蓄積が求められるということを改めて感じました。

竹田　ブックレットの書き手は，所員である限りは一応義務ということで，皆さん一冊は書いていただきたいと思っております。今，小田先生からお話がありましたが，専門外でよく分からないのですが，NHKからのお話があったことは私たちにとっても，大変嬉しいことです。「おにぎり」が注目されているということもあるのですね。先生が資料として使われたのが，農山漁村文化協会から発行された『日本の食生活全集』ということですが，対象とされた時期はいつごろですか。

平井　これは，大きな叢書ですよね。

小田　『日本の食生活全集』を中心に，それに少し他の文献を参照して，全国にどういうおにぎりがあるのかを調べました。

島田　あの本は，大正末期から昭和の初めにかけて，一般の人たちがどういう食べ物をどういうふうに調理をしていたかという事実を，事実を遺しておきたいという意図のもとに，当時実際に調理をしていた主婦に聞いて歩いて資料に残したものです。

竹田　なるほど。

島田　栄養的な解釈，注釈などは抜いて，作っていた人が実際に語った言葉で記録し，都道府県別に纏めてあります。そのため，庶民の食生活の実体をあらわす資料として非常に評価が高くて，近代の食生活について書いてある本を見ていますと，『日本の食生活全集』が記述の根拠になっている場合が随分多いんですよ。

竹田　出版年月日が1984年から92年でしたので，いつの時点の内容を書いているのかなというのが疑問でした。大正末期から昭和初年でしたら，現代ではなく近代といえますね。

小田　紀要に発表しようかと考えていましたが，お話があり，ちょうど時期も近代だからと。

島田　記録されているのは，大正の末期から昭和の初めにかけて実際に調理をしていた人達の話ですから，聞き取りを行った時は70歳以上になっています。よく記憶しているお婆さん達にいちいち聞いて書いていますから，厳密に何年から何年というのは特定できないですね。私は実験系ですから，気になりますが，こういう調査では特定せよ，というのは無理だと思います。

竹田　分析された資料の成立や限界なども，はじめにお書きいただいていれば，私にも理解できたのですが。参考文献には入っていましたが文章の中にそういう内容が見当た

りませんでした。

小田　40ページで統計を取ったところで，これを文献として，と書きました。

竹田　そうですね。5ページ目あたりにそれを書いていただければ。そういうつもりで読んだのですけれど，それが見当たらなかったものですから。時代による変化よりも地方による変化や多様性が主張として出されているわけですね。

小田　そうですね。文献を読んで，おにぎりとか，おむすびとか，出てきた言葉を拾い，不明な部分は不明として起こし，頻度をみました。歴史も少し入れたのですが，海苔を巻いたおにぎりがいつ頃できたのかとか，いつ頃から梅干しが入ったのかとかいったようなところまでいけませんでしたので，第2報でそういうことを書けたらなあと思っています。あくまでもまずこの文献にはこう書かれているということです。

平井　もっと御馳走ならば，江戸時代でも献立やいろんなのが残っていますけれど，おにぎりは残ってないですね。

小田　屯食（とんじき）と呼ばれたことや，貴族が花見をした時に下郎に与えたという記録はありました。御薦さん（おこもさん: 乞食）も施されて食べていたようです。今でも三角形のおにぎりを嫌がる人があります。この間同窓会で駅弁と空弁の話をした時に，おにぎりの話を少ししましたら，家でお嫁さんが三角のおにぎりを子供のお弁当に握っていたら，おばあちゃんが出てきて三角形のおむすびなんて何事だって怒った。三角は不祝儀の時に出すものだ，って。行事によって形を変える，例えば火事の時には丸く握るとか，そういう地域もあります。

平井　コンビニでは丸いのと三角のと，両方売っていますね。何か違うのですか。

小田　メーカーによって違うらしくて，三角の方が形が落ち着くらしいです。持った時に固いようです。テレビで，振動を与えながらご飯を握る機械が紹介されていましたが，人間が手に塩をつけてくるくるとまわしながら握る，あの握り加減になるように，振動させるようです。中に梅干しなどの具を入れてギュッと押さえるときは三角形が握り易いらしいですが，食べた時の食感は固い。

竹田　おにぎりにもいろんなことが，たくさんありそうですね。

小田　若い学生さんは，おにぎりが握れない人が多いんです。実習でご飯が残ったから持って帰っていいわよというとラップを切りまして，そこにご飯茶わんに入れたご飯をポンと入れ，四角の四隅をつまんでキュッと引っ張る…。

島田　にぎり寿司だと握ったときに形がちゃんとしていて，口に入れると崩れるくらいがいいんだそうですね。

平井　渋谷なんかでは「天むす」なんていうのに行列している。あれがどうしておむすびなんだろうか。全然わかりません。

小田　おにぎりは保存食でしたから，具は，昔は塩分を含むものが一般的でしたが，このごろはツナマヨとか海老チリマヨが好まれます。

島田　平井先生，どうしてって仰いましたが，生活文化にかかわるすべてのものは変化するものであると考えるべきではないでしょうか。現代において究極の変化を遂げていますからね。洋服にしても，今の若い人は，昔は下着だったものを上に着ていますよね。スカートの下のレースがついたのを，上に着ている。

平井　スカートの裾から出ていたら顰蹙だったでしょ。今は出るのが当たり前。

島田　その下にジーパンはいたりしていますから。

平井　わけ分からない。

島田　でも，美しいと思って着ているわけですよね。

加藤　びっくり。

平井　おにぎりと同じことですよね。誰がああいうもの発明するんだろうと思う。

島田　仕掛け人が…

加藤　ありますね。食べ物でもほら。

平井　着るものだったら自分でいろんな工夫ができるけれども，おにぎりなんていうのは，誰かが仕掛けているんじゃないのかな。

小田　おにぎりなんて，ごく最近までは買って食べるものじゃありませんでしたね。自分の家でつくって食べるものでした。

竹田　さて次は西脇先生がブックレット4**『昭和30年代の生活世界　―生活マンガの視点から―』**（2005年6月21日）をお書きくださっていますので，ご説明をお願いいたします。

西脇　以前の勉強会で，近代の範囲をどこまでとるかという話になりましたが，その時に高度経済成長の話がありました。それならば，私の専門としている社会学がちょうど高度成長期を近代化が大衆に広がった時代と捉えていますので，そういう視点で纏めることができるかなと思い，ブ

ックレットに入れていただきました。社会学では，社会をマクロのレベルと，一番人間的なミクロのレベルと，その中間のメゾのレベルに分けて考え，このメゾの部分がポイントになります。メゾを介することで，大きい方と小さい方がうまく繋がります。資料についても大中小がありまして，そのような社会学的な視点で一般大衆が実質的に自由化したり，電化生活をえて生活水準が向上する高度成長期を纏めてみようと思いました。資料としては生活マンガを取り上げました。最近では大学の学部でもマンガ学科をつくったようなところもありますが，まだまだ大勢ではありません。幾分かは隙間を埋めるようなニュアンスがあると考えました。結構昔から使われている資料として「サザエさん」があります。これは小中学校のテキストやその副読本にも使われています。それからここで取り上げた「フクちゃん」，これらの時代背景はほとんど同じです。「フクちゃん」の方が新聞掲載期間は少し短いです。それで生活マンガの説明として一部新聞記事も資料的な価値として大切だと思いましたので，それを併せ持ったようなところを入れました。生活マンガの多くは新聞に掲載された連載の4コマのマンガですし，それから最初に使いました「三丁目の夕日」は昭和30年代の生活風景をよく捉えている作品だと評価されています。「サザエさん」は，昭和20年代から昭和49年まで連載され，「フクちゃん」は31年から46年までですね。生活マンガは，突拍子もないものや，スポーツ根性もの，SF的なものではなく，その時代みんなこういう生活をしていたじゃないの，ああそうだったという，共有された世界です。最初は銭湯に行っていたのが内風呂になり，燃料も薪からプロパン，そして都市ガスになります。サザエさんも最初は銭湯ですけれども，割と早い段階で内風呂になっています。電化製品の変遷や自家用車の普及なども長期間に亘る資料から知ることができます。最近のマンガ「あたしンち」などでは各室にエアコンが入っていて，ごく普通の日用品になり自分の部屋の装置になっていることがわかります。変化を時系列に並べると分かりやすいかと思い，マンガを扱ってみました。今回は昭和30年代の生活世界，高度成長でも前半の時期でまだまだ古い部分も残っている時代を扱いましたが，40年代になりますと随分新しい生活に変わりますし，新旧の交代も多くなりますから，機会がありましたらまた書きたいと思います。高度成長が，やはり現代生活の直接のルーツになっているという，そこの部分が生活マンガからも新聞記事からも読みとれます。お手許の資料のようにマクロ・メゾ・ミクロで成り立つ各時代の空間構造と家族のありかたは重層的に重なって今日に至るという構想を一応持っております。時代は生活の利便性を増す方向に進み，物的にも豊かになっていますが，さらにその次の時代からどんどん個人化が進み，良くも悪くも私的空間が拡大し，最終的には，本当の「孤人」の出現に至る変化が跡づけられるのではないかと思います。孤独の孤を使うのはもう20年ぐらい前でしょうか，食卓関係で使われたのが始まりでしょう。

小田　孤食ですね。

西脇　「孤食」という表記まで出てきたわけです。構造的に考えると，結局それに対応する人間は，個人から孤人化しつつあるのではないか。物的に豊かな社会が実現された結果とみてよいのではないかと考えています。自分専用のものがあれば他人のことは考えなくていいわけですし，電話でも何でも，自分が使いたい時に使えてしまう。社会学でも「公共性」を考え直そうという動きもあります。家族のめいめいが各自自室でテレビを見ている，でも同じ番組を見ていた。そういう現象が今の社会の特徴の一つではないでしょうか。極端な例かも知れませんが，傘をある校舎に置いて入り，出てきたらなくなっていたということがありますが，結局，私的空間が拡大しているから目の前に傘があったらそれを差して帰っちゃう。（笑）学生が三軒茶屋まで，歩道を広がって歩いて迷惑がられますが，私的空間が広がっているから，周りへの配慮がない。こうした現実的な現象も考えつつ，もうちょっと学問的には構造的なものを考えて，高度成長で生産された三種の神器や3Cの次の時代に訪れる「モノ離れ」へ，そしてブランドやキャラクターといった付加価値の高度化をみて現在に至る変化をみるつもりです。ポピュラックスはアメリカの評論家（T. Hine）による造語で高度成長を表します。デラックスとかラクシャリー，豪華な豊かなものがポピュラーになり大衆，マス，一般庶民が享受できるようになった時代，ということです。日本の高度成長期の電化生活や核家族，マイホーム，団地の暮らしはスイッチ一つで何でもできたわけですから，やはり非常に近代化の実現を実感できた時代だったと考えています。当時のCMソングなどからもこうした近代化が知られます。

小田　「コミュニケーション」や「しつけ」などについて

の分析を，いくつかの項目に分けて書いていらっしゃいますね。この時代にあっものが今の現代になくなったがために，親殺しなどの，考えられないようなことを平気で起こすのかしらと，また，今の子たちは30年代のしつけの言葉を理解できないかもしれないと思いながら，昨日もう一回読み直させていただきました。サザエさんのマンガでは，悪いことをするとお父さんに納屋に入れられますが，今は納屋がないからそういうこともないし，体罰はいけないというふうになってきてしつけが消滅しています。勉強しなさいと親が言うと子が頭に来て親を殺す。親が子に勉強しなさいと言うことを当たり前だと思うことが間違っているのかしら。もう一度教育の方法も戻らなくてはいけないのかと思います。

安蔵　さきほどもご紹介しましたが，小池先生が『服飾の表情』の「履物の風景」という始めの章で，西脇先生が生活マンガを資料とされるように，昭和60年の「フジ三太郎」の4コママンガで読者をひきつけています。子供の入試に連れ添い，子供に気遣う父親が，靴と下駄を片方ずつ履いて出てしまうという落ちになっていますが，この話は玄関の風景を連想させ，どの家庭の玄関にも靴と下駄が並べて置かれてあった時代を思い起こさせています。現在ではほとんど下駄は玄関から消えていますが，日本人の家の中の過ごし方としては，基本的に履物を脱ぐ習慣が続いています。気にとめてみなければ取り上げられないような物事の変化にも日本人の生活の営みが見えて興味が尽きません。

島田　マンガから生活文化を分析するという視点が面白いなと思いました。キャッチフレーズや時代精神をあらわす言葉が表になっていますが，これは先生が考案されたものか，あるいは一般的に言われていることで，資料がおありですか。

西脇　両方の側面がございます。提起なさっている方もいらっしゃいますし，一応それに対応するような作品や，現象も確かに対応するものがあると思っております。

島田　研究としてみた時には，先生ご自身の言葉で表現された趣旨や，先生独自の時代精神へのある解釈や判断があり，一般的に言われていることとともに考察していただけると面白いのではないかと思います。それはないのですか。

西脇　別のところで書いたものはございます。例えば核家族から核分裂家族に変わり，今では単家族，個家族とか言われています。核分裂家族という言葉は坂東学長の総理府時代の造語です。見かけは小家族の核家族で夫婦と子供から構成されていますが，ちょうど昭和50年代の低成長時代は，どんどんサービス化社会が始まっていった時代ですから専業主婦も減っていきます。子供は塾に行く，お母さんは土，日曜でも仕事に行ったり，お父さんの通勤も長時間化していく時代です。その頃から，喧嘩しているのではありませんが，家族が食事を一緒にするのも難しくなります。核家族は，最初にアメリカの社会学者が定義しましたけれども，それが最小だと思っていたので，Nuclear Familyと名付けた。しかしどうも，その中の構成員が皆また別々な行動をしているということで，核分裂家族と命名されました。確かに，この時代からのいろんな作品を見ても，現象を見てもこういうケースは多くなりました。客観的な，統計的な資料に何を用いるかはなかなか難しいですが，確かにこういうシーンは生活マンガや新聞記事でも対応が見られます。

竹田　私は，社会学はよく分からないので教えていただきたいのですが，先生のご研究は年代の推移を生活マンガという軸で検証されているということになるのですか。

西脇　枠組みは社会学系の人たちでしたら，大体は了解していることではないかと思います。問題は各自が具体的な例証，検証をどのようにするかですね。私としては生活マンガを使ってできないだろうかと考えました。

竹田　それは検証ということになるのでしょうか。生活マンガを使ってある時代について言われていることを検証しようというのが先生の研究の方向付けになるのですか。

西脇　中間資料，つまり多くの人に共有されていたメゾ的資料が分かりやすいのではないかと思います。その時代に生活していた人が見るとああ，こうだったというものが。土曜日の朝日新聞「be」に連載されている「サザエさんをさがして」というコーナーがありますが，あれをもっと纏めるような形だといいなと思っております。

竹田　間違った言い方をしているかもしれませんが，例えば核家族といわれていたということがある。その核家族の中身を生活マンガのなかに深く探ると，こういうことがみられるというふうにクローズアップさせるということはないのですか。

西脇　そういうところを探したいと，もちろん思っておりますけれども。

竹田　あ，そうなんですか。

島田　一般的に社会学で言われていることをマンガの世界を通してみてみたら言われている通りだったというだけだと先生のオリジナリティが足りないし，つまらない気がします。一般論としてこう言われているけれども，ここをこう掘り下げるとこんな面が見えたとか，そういうのが面白いのではないでしょうか。もちろん私自身もそういうところを発表しなければと思っています。

西脇　そういう纏め方ができればよいと思います。

島田　なにか，マンガを通してオリジナルなことを出すべきではないでしょうか。私自身，食文化を研究するに当たっては，そうしなければ，と思っているんですよ…。

西脇　その点では不十分だったと思います。数年前に時系列で生活マンガを並べたことはあります。「サザエさん」と同じ長谷川町子の「エプロンおばさん」が昭和30年代の下宿屋のおばさんの話で，自分の家の2階に学生と働いている人を下宿させています。それから低成長の頃の作品としては「ちびまる子ちゃん」。ちびまる子が「暑いからクーラー買って」とお母さんに頼みますが，「そんな贅沢はできません」と断られる。その時代のクーラーの普及率は17%でしたから，5軒に1軒も持っていない時代です。友人の花輪君と穂波さんはお金持ちの家なので持っています。ちびまる子ちゃんは1クラス40人の学校に通っています。ちなみに現在では1クラス33人です。また当時の水洗化率も低いことがわかります。ちょっとご都合主義かも知れませんけれども，データがあると，照合はしています。その次のバブル期に相当する「たんぽぽさんの詩」，平成不況期から朝日新聞に連載された「となりの山田くん」「ののちゃん」，読売新聞の「あたしンち」などにみえる物的なものの充足について簡単に書いたことがあり，それをもう少し纏めてまたブックレットにさせていただければありがたいと思います。物的な変化を見る中で，人間関係のありかたの変化も纏めることができると思います。子供の付き合い方なども大きく変化しています。「サザエさん」ですと，まだ近隣や異年齢の人々と付き合いますが，「ちびまる子ちゃん」になると同年齢間だけになり，さらに関係が希薄になります。社会のハード面とソフト面を資料を示しながら精緻化したいと思っています。

島田　自分がこれをテーマに研究するとしたらどういうふうにするかを念頭において伺っていました。いろんなマンガがありますがその登場人物の生活レベルの検証。私だったらそれが分からないと何も言えない，身動きできないような気がします。そういうところは社会学の世界では，どういうふうに考えるのですか。

西脇　資料の客観性ということですか。

竹田　階層があるんです。

島田　生活マンガはここら辺のレベルの人を扱っているものだと決まっているのか，それとも先生が一つ一つについてレベルを考察なさるのですか。

西脇　使った資料については，新聞連載の場合，作者が視点を述べています。大勢の方に見ていただくのであまり極端なものや刺激の強いものは載せないというようなことを横山隆一さんも長谷川町子さんも言っています。ただ，現実にどの階層なのかということは難しいですね。

島田　そう厳密には言えないから，こういうふうにみなす，その場合どういう観点からそうみなすのか，どういう見方でみると決めて考察を進めるのか，またその妥当性はあるのか，そういうところが心配です。

西脇　それが，お答えできるといいのですが。

島田　文化的な基準については，恐ろしくてできないという感じです。

竹田　私も同じなのですけれども，人のは客観的に見えても，自分のはわけの分からないことになってくるところがあります。今西脇先生のお話を伺っていて思いましたのは，モノが新しく出てきたときの人間の反応や感情と，モノの移り変わりとがドッキングして，それがマンガに現れているわけですよね。でも普通だとモノにはモノの歴史しかないし，人間には人間の歴史しかない。それを結びつけてこういうモノが現れたらこういう感情をもったということを，組み合わせていかれると，面白いものができるような気がするのですけれど。

西脇　まだまだですね。

竹田　私自身，力不足だと思いますが，その辺の連携がいまひとつわからないような気がしていまして，物が変化すると人間の感情や心理がどう変化していくのかを，マンガを通して分析なさると面白いなと思いました。

平井　そういうところまで突っ込んでいかないと，皆が言っている社会の構造の変化がマンガにどう反映したかということしか言えず，それで終わっちゃうわけですよね。

西脇　半分ですよね。

平井　それで終わっちゃうわけですものね。

竹田　検証しているだけでは面白くないと思います。

島田　それだけで終わっちゃうと評論になってしまって研究にはならないと見ていいわけですね。

大橋　文化史的研究の奥行きの深さと幅の広さを感じます。歴史的変化という縦の流れとその時々の社会的な現象や出来事など諸々の要因，縦糸と横糸がしっかり編みこまれていないと何か心もとない研究になってしまいそうです。私が数十年前に文化史的研究の進め方に迷いだしたのは，実はこのようなことが原因でした。その結果，自分の勉強不足もあって，手も足も出なくなってしまいました。

平井　全然話が違っちゃうかもしれませんけれども，高度経済成長期までのところは，今，博物館の展示ブームですね。高度経済成長期後には人は関心を示さない。その辺のところは高度経済成長期の前だったら，それだけを取り上げた資料館でも人が集まるけれど，そこから後は関心が続かないというのが分かりません。将来，世代が移り変わっていくと高度成長期も関心を寄せられるようになるのかどうか，そういう点もこういうことをやっていらっしゃる目を通して教えていただければ嬉しいですね。

竹田　私などは簡単に推測しているだけなのですが，高度経済成長期にはモノの発展がありますね。同時にまだ精神的なものが残っていて精神と物質との発展・発達のバランスが取れていた時代じゃないかなと思うのです。そういう意味でとても面白いのではないか。それ以降は物質だけがどんどん先行して，人間の精神が追い付いていかないばかりか，荒廃していくという，逆方向に進んでしまった。高度経済成長期を懐かしく思えてくるのはそのバランスの良さのためじゃないかなという気がします。これは私の感じ方だけの話かもしれませんが，もしそれがそうならば，実証すると面白いなと思いました。それからもう一つはマンガを挿絵に使えればいいと思いましたが，それは難しいですか。

西脇　著作権の問題が難しいですね。

竹田　それは残念ですね。

西脇　普通，高度成長といいますと，拡大再生産。私たちもそう教わってきましたが，数年前にNHKの「プロジェクトX」でこの時代に誕生したモノや事柄を扱っていましたけれども，あれを担っている方たちは，戦争体験のある方，つまり死ぬ気で働くことができた方々ですね。今生きていることは本当に有り難いことだから一生懸命働いてその分に見合うことをする。働いても空襲受けるわけじゃありませんから，モーレツに一生懸命働けるわけです。そういう死のコンボイ世代のエネルギーが生産を押し上げたことはあると思います。戦闘機の技術を新幹線に生かしたとか。私たちは死ぬ気でやれと言われても，頭では分かるけれどそれ以上突破できません。私たちも今の若い方よりはそういう気持ちは持っているかもしれませんが不十分ですから，そこでもう一つ乗り越えられないのではないかと言われます。確かにそういう物的なものと精神的なものが連携していた時代なのかも知れませんね。そういうところをうまく説明できる方法があるといいですが。

島田　竹田先生が仰ったのは一つの視点として考えられるということですね。西脇先生がご自分の視点で掘り下げていかれると研究として面白くなると，そう思っていいですかね。先日，「味の素食の文化サロン」で山口昌伴さんから伺いましたが，道具と道具を使う人間，そういう観点からいろんなものを見ていくとそこに生活文化が見えるのではないかと思って本を書いたと仰っていました。一つの視点として面白いですね。

竹田　マンガは言葉も発しているでしょうし，その表情とか，行動とかからも分析できますね。台詞は吹き出しに書いてあるかと思いますけれど，そういうものと合わせながら考察なさると面白いでしょうね。

平井　今，島田先生が仰ったような，山口さんのなさっているような道具の研究は立ち遅れているのではないですか。建築ですと，道具の使い方の変化を度外視して歴史は書けないわけですよね。道具だって，前の道具があってそれが何らかの形で変化していくには使い勝手の理由があるわけですから，それ抜きで形だけの変化を調べても歴史にならない。

竹田　平井先生，最後にブックレット最新刊について少しお願いします。

平井　いや特に私は何も言うことはないのですけれども，ずっと温めてきていたものでしたから，それを本にさせていただきました。モノもそうですけれども，住まいが変わるということも当然住まい方が変わるからで，住まい方の研究なしで住まいの歴史は書けないと考えています。工学部の現実は，道具の世界がそうであったように，どちらかと言うとモノだけの変遷をみてきたことに，東大のもう亡くなった太田博太郎先生が随分前に気づかれ，住まい方の研究に先鞭をつけられました。生活とのかかわりで建物はみていかなくてはいけない，お寺でもそうですけれども行

事との関係でお寺を見なければお寺の建物は分からないのだという，そういう立場というのは建築の中にある程度あります。けれどもまだ主流かどうかわかりません。物がこう変わっていったという，その技術的な根拠の方がまだ主流かも知れませんね。しかしやはり建築は，少なくとも住居は，住まい方の変化が大きく作用します。たとえば突然外国から移入したとき，竹田先生が研究されていらっしゃるようなスウェーデンハウスみたいなものが入ってくれば，これは突然違うものが入ってくるわけですけれども，そうでなければ，昔の建物の中で住まい方が変わって，次に建てる時に，あるいは改造する時に，新しい住まい方に合うように建物を変えていきますから，生活が変わっていかない限り建物は変わりません。その辺のところをきちんと押さえていきたいというのが私のずっとやってきた立場です。ところが住まい方だけ分かるものはある程度あるし，建物だけ分かるものもありますが，両方が分かるものはほとんどありません。その点で，明治村に移築されて遺されている家が，『吾輩は猫である』が執筆された当時の漱石の家というのは非常にいいサンプルです。他にも部分的には，より詳しく記述された資料が明治の小説の中にもありますけれども，建築物が遺っていない。そういう点ではこれを放っておくわけにはいかない。けれど放っておくわけにはいかないと言っても，これは典型的な例ではなくて，ある一つの時代を画したスタイルを遺しているわけではありません。この家が建築史の流れの中のどういう位置にあるのかを明らかにしないかぎりこの資料は使えない，というのがこの本のとる立場です。「猫の家」は近代化の途中にあるのですけれども，どういう途中なのかというのを一応確かめようとしただけの話で，研究の一つの方法例として，書いておきたいと思っただけです。それがどこまで伝わるかどうか分からないのですけれども。少なくとも住居の歴史を研究する人には読んで欲しくて，大分差し上げましたから，読んで下さった方もいらっしゃると思います。日本人の住居に関することをこれからぽつぽつ書いて，私のやってきたことを，少しでも遺せたらと思います。

島田　やっぱり先生は長年の蓄積がおありになるから，こういうのがお書きになれるのですね。私にはとても無理です…。

大橋　平井先生のお話を伺っていますと，自分の今やっていることが，非常に狭いところで結論付けようとしていることを感じると同時に，これでいいのかしらとまたまた研究への疑問が湧いてきます。

平井　本当は明治時代は専門じゃないんですよ。私の専門はもうちょっと古い方ですけれども，古いところをやっていたからこのようにみられたということはあります。明治時代だけやっていたら，うまくみえなかったかもしれないという気がします。

小田　古い時代からずっと繋がっていますから歴史をどこかでぽつんと切るということはできませんね。昭和は昨日で終わって今日から平成といっても，呼び方が変わっただけであって，何も変わっていません。

竹田　本当に，平井先生の場合は江戸時代もやっていらっしゃるので，江戸時代と明治時代をきちんと通しでご覧になれるところが強みですね。

小田　民家も，武家屋敷も，どこがどう変わってきているのか，細かなところまで把握されていて，私などにはそれはできません。どこがどう変わってきてるかなんていうのはとても。

平井　日本建築史の本は，大概江戸時代までで終わっていて明治から後の記述はないんですよ。

小田　西洋文化が入ってきた。

平井　それは「近代建築史」として書かれる。「日本建築史」は当然今日まで続いてもいいのに，江戸時代で終わっちゃうんですよ。それも私が教わる頃の日本建築史には江戸時代もほとんど入っていませんでした。江戸時代なんていうのはつまんない時代だから書くことはないという有様で，せいぜい茶室，それも古い時代の茶室しか出てこなかったですね。私が学生の頃の日本建築史の本は，奈良時代とか平安時代に割かれるページ数が多く，それ以降は段々少なくなって，江戸時代なんてのは，5ページあったらいい方で，そこで終わっています。典型的な例は，中央公論美術出版が出している大岡実先生の『日本の建築』です。先生は奈良時代が絶対だと思っていらっしゃった方ですし，法隆寺の昭和修理に当たられ火事で引責辞職なさり，その後横浜国大の先生になられた方です。この本はもう先生の思うところをそのままお書きになったからそういうバランスなんですね。今でしたら時代の長さをみて江戸時代にも相当のページ数が必要だと思うでしょうけれど，そういうことを思わない時代ですから。私のついた先生が桃山・江戸期が専門でしたから私がこういう仕事ができたんだとは思います。大岡先生は極めて熱心な方でしたから，横浜国

大で1人の学生を育てようとなさった時には，2人でリュック背負って日本中の禅宗のお寺を片っ端から歩いて，そのお弟子さんを禅宗建築の専門家に育てられた。ご自身は古代でしたからお弟子さんを中世に。その頃江戸時代なんてやっている人はほとんどいませんでした…。

竹田　近代の範囲を江戸末期から高度経済成長期までというふうに考えていますけれども，近代というのは市民が中心になる時代なのかなと思っています。江戸時代は，中期以降は庶民が力を持ってきますね。市民社会を形成したまでとは言わないのですけれども，そういうものを作りかけてきた時代というのであれば，何かそれは近代というものにも繋がるのかなというように思いますがいかがでしょうか。

平井　庶民というものをどういう範囲で捉えるかという問題がもう一つあると思います。江戸時代で庶民という言い方をすると，町民と農民ですね。けれど武士でも中級以下はむしろ庶民と呼んでよい生活をしています。権力は多少あったとしても，もうほとんどサラリーマンですから。参勤交代で江戸詰めになった武士なんて全くそうで，江戸の長屋暮らしで本当にすることないんですね。参勤交代は例えば3千人の御供連れてこいといわれるから3千人連れてくるだけの話で，その3千人は江戸に来ても何もすることないんです。その中の100人位は登城するときに行列を組まなければいけないから必要ですけれども，ほかの人たちは暇ですから，長屋の窓から竿の先に笊を付けてそこにお金を入れ，外の行商から物を買ってみたり，こっそり芝居見物に行ったり，そういうのは日記の中に結構出てきますね。江戸屋敷の中の人には家族単位で暮らす人も少しはいますから，単身赴任の江戸詰めにしてみればそれが羨ましかったようです。普通は1年経つと帰れるのですが，それも殿様が将軍からお許しいただかないと帰れません。殿様が挨拶に行ったその日になって将軍からもう1年いてくれといわれて帰り，江戸屋敷でひと騒動起こっている絵も残っています。もう，やけになって飲んで，大騒ぎして，雨戸を踏み倒してそこら中で暴れています。そういう世界だったわけです。そういう中で，料理学校に通う武士もいましたし，下級武士はかなり準庶民的な生活だと言っていいと思います。明治からは想像もつかないかもしれませんが，戦争が起こるなんて絶対誰も考えていません。次第に権力の縛りが緩み，実際に実力行使がなくなってくると，不自由といえばせいぜい江戸から帰れないことぐらいで，殊に藩による縛りが少なくなっていきます。住宅についても藩が標準設計を示して規制し，藩の所有地に藩のお金で建てて住まわせていますが，その規制も緩んできます。つまりお前はここへと言われてすでにある家へ入るのが普通ですが，焼けたりするとお金を貸してお前相応の家を立てろと言われる。官舎，社宅みたいなものですから，建ててもいつまた違うところへ引っ越せといわれるか分かりません。官舎ですから標準設計が必要なわけですけれど，その縛りが次第に利かなくなる。つまり住みいい家に建て替えるようになる。その動きが1750年頃，江戸時代中期よりすこし後にはみられます。藩の縛りが強いところですと，古い形のままで作り続けたところもありますが，緩いところは加速されますから，結局，主人の部屋を生活条件のいい，日当たりのいい位置につくるようになり，明治を迎えます。明治の人たちはそれを見て，主人が一番いい条件の部屋を使うことが封建的なことだと思っています。確かにそれも封建的ですけれども，それは，2段階目なのであり，その前段階の標準設計で建てられた住宅は，方位も日当たりも全く関係なしに強制的に建てさせられているわけです。その2段階目のちょっと緩んだ封建的な家が明治以降の標準になります。近代化は明治から本格的に始まるのでしょうけれども，この江戸時代の2段階目も，近代化を生活の快適性の実現と捉えるならば，それは近代化の走りだと私はみています。そうみないと封建的なことが何だったのか分からなくなるのです。封建的なことと対立するような形で近代をみているのが私の立場かも知れません。

竹田　平井先生のご専門のお立場から，特に近代の生活文化について，いろんなことを直接お聞かせいただきたいなと思っております。私は先生のブックレットを読ませていただいて，先生が洋風化を敵のように考えていらっしゃるような気がするのですけれども，洋風化と近代化は重なるところも多いのではないでしょうか。考え方として例えば，「男女平等」は近代化，「レディファースト」は洋風化といったように，考え方として形をださないものは近代化，目に見えて形をとるものは洋風化とみることができると思います。混同し易いところですが，先生は最初のところに洋風化を何でも近代化という，というふうに書かれていて，そこは違うのではないかと。

平井　それはね，今までの人たちの住宅史ではそう言っているのがほとんどだから。和風で近代化なんて誰も言って

いませんから。

竹田　それはそうだと思いますけれど。

平井　江戸東京博物館の建物園で近代化についての基調講演をした時，これから後の講演では多分，近代化＝洋風化という前提のお話をなさるでしょうけれども，近代化は和風にもあるのですよと話しましたら，後の方は困ったみたいですけれども。(笑)

島田　あ，なるほどね。言葉って難しいですよね。

平井　和風だって近代化するはずでしょう。

一同　それはそうですよね。

安蔵　衣生活の変遷で和装から洋装へという，一見分かりやすい外発的な開化が，一般的には近代化と捉えられています。洋装が和装より合理性に富み，優っているという偏った考え方も支配していると思われます。洋装文化の展開が近代化だとする感覚です。しかし，平井先生が言われるとおり，近代化の解釈は一辺倒ではなく，和装にも近代化がありますし，そもそも和装とか洋装というように分離できない側面を持っていると思います。分かりやすいはずの外形的な見方だけでは探ることができませんので，さまざまなものを資料にして生かさなければならないと承知していますが容易ではありませんよね。服飾の場合は，生活様式の一部とはいえ，当然，美術工芸，技術，生産流通，美意識，教育，思想，…と，前代からの背景も踏まえて多方面から検討することが求められます。

島田　新聞とかテレビがこの頃，食生活が洋風化したっていいますね。もうあれは間違いですから，いつも頭にきています。日本の食生活は多様化したのだけれど洋風化したわけではありません。外来の食を取り入れて，肉などが増えて多様化してはいても，決して洋風化したわけじゃないんですね。ヨーロッパとかアメリカの食事とは違うのに，何でも洋風化といってしまう。

平井　日本の文化そのものが多様化するというのが，常でしょう。いつの時代でもそうでしょう。

島田　いつもそうですよ。外国の文化を受け入れて。でもそもそも，いろいろなものを受け入れて，変化してつくられていくのが，文化なんですよね。

平井　そうだと思います。その中でね，日本人は日本人の好みにあうものしか残さないんです。

竹田　そうですよね。

平井　自分の好みに合うように変えるか，合わないものを捨てるか，どっちかなんですよ。

小田　食べ物なんかでも欧米から入ってきたものを日本風に直して日本人が好めるようなものに変えていく。

平井　そうでなければ，もうやめちゃうか，どっちかなんです。

島田　外来の食の日本化，定着については，熊倉功夫さんが受容・選択・変容・融合の4つの段階を経て定着すると書いていらっしゃいます。受容の段階で一気に流行し，合わなければ選択の段階で捨てる。それからまた変容の段階で好みに変え，最後に融合します。この考えを当てはめると，一応試したけれど捨てたものにナタデココがありますね。ティラミスはどうでしょうか。

平井　ティラミスはありますよ。

島田　紅茶キノコみたいなものもあります。

小田　日本人て，何かのきっかけがあって，パッと出ると，それにくっつきます。ココアのポリフェノールがいいとなると，ココアがスーパーからなくなる。今はどこへ行ってもココアはあります。

島田　ココアのポリフェノールはフードファディズムです。情報に惑わされる，社会の一種の病理ですね。

平井　マンションの玄関ドアは外に開きますね。でも欧米や中国から入ってきた扉は全て内開きでした。だけどそれを3度捨てています。奈良時代，鎌倉時代の初め，明治に同じ内開きを習っておきながら，それを絶対採用していないのです。そういうものが建築にもたくさんありまして，どちらかというと整然としてきちんとした形にできるものは残すけれども，そうでないものは捨てちゃうというのはあります。斜めの線は嫌いますね。筋交いも多分奈良時代にも鎌倉時代にも入っていると思いますけれども，使わなかった。近年の地震対策で法律に謳われて，入れないと役所で赤線を斜めに入れられるから仕方がなくて入れていますが，そうでなかったら絶対入れないですよ。

[録音テープの切れる音]

島田　しまった。テープ録音されているのを忘れていろんなこと言っちゃった，どうしよう。(笑)

竹田　まだいろいろとお聞きしたいこともたくさんあると思いますが，時間になりましたので，ここで終わらせていただきます。今日は有り難うございました。